



古事記

竹葉 秀雄

天地の初発のとき

—西洋哲学—(八)

反省的方法—

二、認識批判 フツセアルの現象学

フツセアルは、カントの先験哲学を其主観主義傾向の故を以て非難したボルツァーノ(Bolzano, 1781—1848)の知識学の、客観主義的純粹論理主義を継承し、現実なる人間意識に実現せらるる主観と独立に、何人の意識するとせざるとに拘らず、斯かる意識の作用と内容とを超えてそれ自身に存立する意味的对象の存することを強調し、斯かる対象に固有なる先験的法則を論理の内容とした。即ち徹底せられた論理主義を採る。啻に一般的なる形式論理学のみならず認識対象の諸領域を規定する範疇を明にする先験論理学(カント)といえども、凡て対象の先験的法則をその内容とする。それ等の法則は事実から帰納せられた事実的法則でなくして、事実を基底とし之を機縁としてそれに即し観照せられたる本質的法則である。本質とは昔の希臘哲学に於ける形相の謂に外ならぬ。我々は事実即して形相を観る。是れ形相化 Ideation である。斯く事実を基底として本質を観照する立場に移り、事実を、それに斯くの事実たる規定を賦与する本質 Wesen als Sosein にまで還元することを形相的還元 eidetische Reduktion とす。其手続を通し

第 64 号  
月 | 回 発 行  
ひの心を継ぐ会  
〒799-1336  
住所:愛媛県西条市  
上市甲 720-1  
TEL:080-2986-0856

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は大和世界を建設します

て事物の本質的構造を観るのが本質科学であり形相学である。数学は一般に本質科学の典型と考えられた。斯くて論理主義的客観主義の徹底は本質科学或は形相学の理念に導く。所謂普通学 mathesis universalis 是である。哲学も所謂厳密なる学 Strenge Wissenschaft として成立する以上は、先験的本質学でなければならぬ。併し単なる本質学は未だ以て哲学とする訳には行かぬ。それが凡て客観の本質と考えられる限り未だ哲学ではない。哲学は此等の本質を凡て直接明証的なる意識の本質構造に還元し、意識に直接顕わなる現象として観照するのてなければならぬ。即ちデカルト(Descartes, 1596—1650)が、その出发点に於て一切を疑い、遂に疑うべからざる「我思う、故に我有り」Cogito, ergo sum の直接明白なる自覚の本質に哲学の根柢を求めた如く、フツセアルも自覚に現るる意識の本質に哲学の立場を見出したのである。これが究極的自省の帰着点であり、哲学の立場である。彼が之を自我論的 egologisch というのも自覚の Ego cogito(我思う)を哲学の欠くべからざる要件とする為に外ならぬ。アウグステイヌス(Augustinus, 354—430)に始まり、デカルトに於て古典的な形に言現わされた、自覚の直接確実性に哲学の出发点を求めめる思想は、フツセアルに於て学的形態を与えられたと言つてよい。凡ての客観は「意識せられたもの」として一般に意識に内在化せしめられ(客観は主観によって客観たることが意識せられ、主観もまた客観によって主観たるを意識する。竹葉)自然的態度に固有なるその意識に対する超越性の要求を排除し、凡て之を括弧に括ることが出来る。斯様に先験的意識に凡ての対象を内在化せしめ、客観をこれに還元する手続を先験的還元 transzendente Reduktion と称する。本質も凡て

先験的に意識に還元せられて意識せられた本質となる。ところで意識せられた本質が本質として普遍性を有する為めには、意識そのものが本質的構造を有し、意識の本質的な総合に対応して意識せられたる対象の本質が構成せられるのでなければならぬ。先験的還元と形相的還元とを結合して、意識の本質的構造対象の本質的構造を観、之を分析的に記述するのが（先験的）現象学である。其意味に於て両還元の結合現象学的還元という。之を哲学の方法とし、先験的主観自我論的自覚の立場から徹底的反省をなさんとするのが現象学的方法である。その所謂現象とは本体に対する現象の意でなく、此語の原意に従って、（意識に）顕わなるものの謂である。

※昭和四十七年八月一日 第百七十五号「ひ」より引用

## 農士道

## 第六章 日本農道の本義

## 一節 日本精神の真髓

## 四、「大和」の深義

## 大和の国

吾等日本人は実にこの純粹至高の感激を以て大君に奉仕する大和民族である。「やまと」の国名に「大和」の文字を当用した吾等日本人の祖先の深き哲学に想到すれば、真に驚嘆なきを得ないではないか。一体「やまと」とは今の奈良県一帯の土地の名称であったのである。神武天皇が此の国の畝傍山に即位の大礼を挙げ、日本国家統治の大任に即かせられたのであるが、以後此の「やまと」の地は、日本国家の「日の本」たる至尊の在ます所となり、国民は常にこの「やまと」を中心に「各性命を正しうして、太和に保合——易経——」せんとしたのである。「大和」の漢字をどう訓んでも「やまと」と読むは無理であろうのに、吾等の祖先は敢えてこの文字を当てたのは、抑々如何なる理由であつたのか。思うに日本民族は、前述の如く「ひの本」民族である。決して「ひの末」原理によって分裂排他せんとする国民に非ずして、飽くまでも「ひの本」原理に従つて没我奉仕する民族である。この民族性が「ひの本」国家の「本」にまします。天皇のいます所に向つて翕然として没我奉仕して「大和」せんとしたのである。随つて其の帝都たる「やまと」の国を我等の「大和」すべき中心の地としたのである。日本国民と雖も、勿論其の間に幾つかの勢力があり、幾つかの集団もあるう。然しそれら一切は一たび 天皇のいます「やまと」に対する時、融然渾然として「大和」に帰するのである。「各性命を正しうして、太和に保合す」という易経の哲理は、肅然たる事実として此処に実現したのである。

あゝ、吾等は「大和」の国の、「大和」の民ぞ！

かくて吾等は、「大和」の原理に立つて、「大和」の生活に生くべきである。

然かも、何たる醜態ぞ。近来、国民間に分列、対立、排他、鬭争の修羅場的状态の存せしとは。「ひの本」国民も、遂にあわれ「ひの末」の民と墮せんとせしか。

醒めよ！

## 菅原 兵治

今こそ、「ひの本」の国の国民が、「大和」心に醒むる秋ではないか。

## 「仕」の一念

我等日本人は、実に此の感激を以て没我奉仕する「ひの本」民族である。其の心を最も端的に把握するならば「仕」の一字に帰する。仕——つかえる——此の一念を以て大君の為に奉仕すれば是れ即ち忠であり、此の一念を以て親の為に奉仕すれば、是れ即ち孝である。苟も日本人が日本人の感激を以て、最も純粹に行動する時、其処におのずから此の「仕」の一念——没我奉仕の「ひの本」精神が発露している。此の一念に立つて、職業的活動にいそむを、此れを是れ「仕事」というのである。

## 本の本

外篇に於て陰陽文質の理より本末の関係を明かにし、農道生活は其の原理を「質」——即ち「本」に置くべきことを述べた。而して本章に於ては日本精神の真髓が、亦「本」の原理にあることを論じた次第である。かかる観点より日本農道の本義を考察すれば、「本」の中の最も「本」たるべきものたることが明らかにされたことと思う。日本は世界の「ひの本」国家であり、農は又其の「国の本」なるのである。かくて日本農道は「本之又本」たるものと謂うべく、最も純粹深毅に「本」の原理に従うべきものである。

## 歴史の学び

三浦夏南

最近では専ら日本の歴史を勉強している。今まで何度も挑戦して通読に至らなかった徳富蘇峰翁の『近世日本国民史』を改めて読み進めている。今までは人間の理想の側面が記してある所謂「経書」を好んで学んできたが、年も三十を越えて、人間の現実が記してある「史書」の面白さが少しずつ分かり始めて来た。とりわけ「経書」的価値から言えば、秩序無き時代である室町戦国の方の方が、古代聖王の栄光の時代以上に興味を惹かれる。それは現代が戦国時代以上に墮落し混迷を極めた乱世であるから、自分たちの置かれている境遇が、戦国時代に重なって、身に切実に感じられるからであろう。

後醍醐天皇の勅命を奉じ、忠義の為に一族一統生命を賭した楠氏の生きざまに憧れるけれども、戦乱の世に生まれ、本来ならば忠義を尽くす相手であるはずの宗家と対立し、君主を差し挟んで、織田家惣領にのし上がった織田信長の人生の方が、我々には切実に感ぜられるのである。勿論君主を盾にして宗家を滅ぼす、所謂「下剋上」の生き方が好ましいものでないことは重々分かっている。しかし、道が二つに分岐するとき、左を選んでも非、右を選んでも非という状況の中で、苦渋の決断を繰り返して行くことでしか、生存することの出来なかった戦乱の世の猛者たちの心中は、それを単に後世の人々の客観的な立場から批判するだけでは決して見えてこない。我々も彼ら以上に左右どちらを選ぶとも非という戦乱の世に生まれている以上、彼らの心に自らの心を照らし合わせて、己を切実に省みる必要があるのではないか。

歴史をさらに遡り、神話の世界を覗いてみても、神々の国土創成の時代から、同じ苦境と戦ってきたことが伺える。大国主命が出雲の神々の中で、衰えてしまった嫡流であったのか、それとも末流であったのかは、正確には分からない。万世一系の神話を信ずるものとしては、時代の流れの中で衰えた嫡流の子孫であると考えたい。ご兄弟の神々に袋を背負わされて従者のように扱われていた大国主命が、様々な試練を経て須佐之男命の正統を継承し、ご兄弟を打ち平らげて、国づくりを進められる御姿は、乱世を統一へと導く英雄の原型ではないかと思う。因幡の白兔の

神話からも分かるように、本来的に仁愛に溢れる和魂の神である大国主命が、自ら進んでご兄弟を征伐されたとはとても考えられない。時代が移り変わり、世が乱れる中で祖神の道統を忘却し、霸道に陥りつつあったご兄弟を、涙を堪えながら打ち平らげたのではないかと推察される。出雲嫡流の大神にして然り、況や乱世に生まれた末流の民草である我々が苦渋の決断に迫られるのは当然の道行きかもしれない。

矛盾した状況が当たり前となってしまうている現実の中で、理想を追求すれば、そこには必然的に苦しみを伴う決断が連続する。しかし、その中で生き抜くしかないのが我々の現実である以上、乱世に生きた戦国の先人の生き様は我々の鏡となり、心の支えとなるものと思う。これからもそのことを信じて、歴史の学びを深めて行きたい。

## 近藤美佐子先生の思い出

越智 敏雄

近藤美佐子先生は、愛媛県師友会ひの会会長として、日本を守る国民運動に参画していただいております。

昭和五十七年二月十一日に結成された「日本を守る愛媛県民会議」、昭和五十九年九月六日に結成された「建国記念の日奉祝愛媛県実行委員会」、平成十一年十一月七日に設立された「日本会議愛媛県本部」ではそれぞれ役員にご就任賜り、平成十九年十月二十日結成の「日本女性の会愛媛」(日本会議愛媛県本部の女性部会)では会長にご就任賜り、懇切なご指導を賜っております。

特に今回ご紹介したいのは、平成十四年十一月二十四日、愛媛県教科書改善連絡協議会が主催した講演会において近藤美佐子先生が「愛媛の教育改革はここから始まった」昭和三十年年代初頭の勤務評定紛争を振り返って」との演題で講演を行われたことです。

この講演会で近藤先生は、「今年の夏は皆様方の大変なご活動によりまして、愛媛県教育委員会は全国に先駆けて扶桑社の歴史教科書を採用するという快挙を成し遂げました。誠に同慶の至りでございます。今(平成十四年)から四十五年前、愛媛県教育委員会はこれまた全国に先駆けまして教育の正常化への道を拓きました。当時猖獗を極めておりました日教組、その日教組の御三家の一つと言われていた強力な愛媛県教職員組合を、ほとんど壊滅せしめて教育正常化へと進んだのであります。」と語られ、勤務評定紛争についてご紹介されました。その勤務評定導入のときに、愛媛県教育委員会の委員長をおつとめになられたのが竹葉秀雄先生でした。竹葉先生は、昭和三十一年、久松定武愛媛県知事から愛媛県教育委員長として任命され、日教組の暴力的な圧力に屈することなく勤務評定の導入を貫徹されました。これによって愛媛の日教組は壊滅したのですが、その経緯を近藤先生は詳細にお話ししてくださいました。

私は、昭和三十八年三月生まれですが、なぜ愛媛に日教組の教師がないのかその理由をこの時の近藤先生のお話で初めて知りました。命がけて愛媛の教育を正常化してくださった竹葉秀雄先生の御恩を決して忘れてはならないと強く思っ

た次第です。近藤先生はご講演の結びで、この時の竹葉先生のお言葉を紹介されています。

「竹葉先生は勤評のことは『あれは済んだことだ』と余り話しながらなかったのですが、たまに、こんなふうに言われました。『あれは、鋤で土をひっくり返したようなもので、本当の教育はこれから始まる。土をこなして、種をまいて、水や肥料をやり、そして大輪の花を咲かせねばならない。そのなかで一番大切なことは、この日本がどんなに美しい国か、それを教えることだ。そして一人一人がどんなに素晴らしい輝きを持っておるか、それを更に輝かせるような教育をしなければならぬ。そのような愛媛のすばらしい教育がいつか花開く時が来る』と。」

私(越智敏雄)は、この御言葉をかみしめつつ、愛媛の素晴らしい教育の開花のために、これからも微力ながら尽くして参りたいと思っております。

なお、この近藤美佐子先生の講演録は、日本会議愛媛県本部のホームページに掲載しておりますので、ぜひお読みください。

今号から三浦家で農業研修を受けてくれている今村亮太君の文章を掲載して参ります。

## 自己紹介

### 今村 亮太

はじめまして。兵庫県出身、二十一歳今村亮太と申します。今回は簡単な自己紹介と私の志について書き起こさせていただきます。

私は平成十三年に兵庫県の川西市にて、父浩・母千代子の間の長男として生まれました。幼少期の私は、非常に甘えん坊で父の仕事の帰りをいつも待ちわび、母にはいつもくっついていて體も細く、心も弱気でありました。私は幼稚園から小学校を通して空手を習っておりましたが、そこでも組手などの対戦に於いて、心の弱さから負けばかりを積み重ねておりました。小学5年生には、空手を辞めてしまいました。

そんな貧弱な中学時代までを過ごしていた私でしたが、中学2年の時大きな転機が訪れました。それは安全保障条約改正であります。それまでニュースなど興味もなかった私でしたが、国会前のデモ中継の映像をみて、ただ事ではないと政治に関心を持つようになりました。いろいろ調べていく中で自衛隊という組織を知り、我が国の国防の現状を知り、何かせねばならぬと国防の道に志しました。というのは半分本当なのですが、半分は当時厳しさに反骨し、不仲だった父の元を離れたいという思いがあったのも正直なところであります。思えば何たる不敬かと思えます。今は父にも当時の思いを正直に打ち明け、非常に感謝している旨を伝えられた事はうれしく思っております。

話がそれましたが、私は神奈川横須賀の陸上自衛隊高等工科学校に入校する事になりました。親元を離れ、軍隊の世界に一人飛び込んで行く期待と不安という裏腹な気持ちで迎えた着校の日を昨日の日のように覚えております。そして、軍隊の世界というものを思い知らされました。一分一秒の速度を求められる時間の厳しい生活、飛び交う怒号、シメと呼ばれる腕立てや懸垂、とんでくる先輩の拳。いままで生きていた世界とはまるで違う世界に、困惑する間もなく必死に目の前の事に食らいついていく日々が始まったのです。高校時代の思い出はたくさんあり

ますが、そんな普通ではない自衛隊高校の生活の中で、私は国防の志をますます強めていくのであります。貧弱だった私を教官助教・先輩方のご指導のお蔭様をもって、心身共に少しずつ強くなっていきました。そうして卒業を迎え、各種教育課程を終えて、三重県伊勢市の明野駐屯地・飛行教導隊に着隊を命ぜられたのでした。そこで私は非常に悩むことになりました。それは、自衛隊の現場部隊は非常に弱く、士気も低く、訓練内容も不十分な練度でありました。私は一部の国防の志高い諸先輩方のご指導を頂き、様々なことを相談させてもらう中で、自衛隊という組織の中からは、この組織を根本的に改革することはできないという判断に至りました。そして退職して、大学院にて社会の様々なことを学び、この問題の根本を解決する方法を模索し、その研究成果をもって世の中に広めていくことを志しました。

そして、人生2度目の大転換期が訪れます。今年の2月、三重県熊野むすびの里にて、以前からお世話になっていた荒谷卓さんに、日本自治集団の農士候補生のお話を頂きました。

「大学で学ぼうとしていることに意味はない、本当の日本はここから学べ」

「人に教えるという事は俺くらいになってか、三浦さんくらい勉強してからいっもんだ」と言われました。

そうして、私は3月にひの心を継ぐ会・三浦家にお邪魔させていただきました。半日もたたずに、三浦家でお世話になることを決心いたしました。四力月勉強させていただいた今、「ナイスあんときの俺」と今では心から思いますが、当時学の全くない私は、半分勢いで飛び込んだのもあると思います。三浦家の方々や荒谷さんの活動や言葉に非常に引き付けられる何かがあったのです。これは合理では説明のできない、神秘なる世界であります。農士候補生として勉強させていただきました。国體や農本主義の重要性をますます確信するに至り、日々邁進しております。しかし私の志すところは、十六歳の入隊以来かわらない、この国を守りたいという一心であります。ご先祖様・親をはじめ、自衛隊の先輩方、自治集団の方々、多くの方のご支援やご指導により、今ここに自分がいることを深く自覚して、これから日々精進してまいります。



とよくも農園だより

日中に一歩外へ出ようとすると危険な暑さで、農作業をすること自体が厳しかった二か月となりました。私達が子供だった十五年前前には、三十度を超える日が稀でしたが、最近では三十度越えは連日続き、中には四十九度近くまで上る日もあり、生命の危機を感じます。夏は様々な生命が大きく生長するチャンスであるとともに、その暑さで弱らないよう管理する時期であると感じました。

具体的には、湿度と暑さで草がグンと伸びたため、各圃場の草管理を行ったり、お米や夏野菜、果樹の追肥を行ったりしました。また暑さをしのぐために鶏小屋に寒冷紗をかけたたり、番犬チャチャは日陰に連れて行ったりといった対策も行いました。

お寺さんでは、今年の夏も夏野菜がたくさん獲れ、ほぼ毎日食卓にトマト、ナス、キュウリ、紫蘇、ズッキーニ、オクラが並びます。料理をする際は、彩り豊かな野菜を、できるだけ新鮮なうちに、生で食べられるように心がけています。それが自然の恩恵を最も受け取れる道だと思っております。毎日ご飯準備の始めには、自分達の育てたお米で発芽玄米を作り、西条を流れるうちぬきのお水で優しく洗って、お庭で採れた塩を一振りし、丁寧に飯を炊いています。自分達が育てたお米や塩、野菜を食べていると、自然と心が満たされます。三年前には考えられなかった、玄米、漬物、味噌汁、サラダといった質素な食生活が当たり前となり、食事によって心身が完全に満たされるよう



三浦 美恵

になりました。

五月にたくさん定植した早生米はぐんぐん育っており、主人達が手分けして毎日水の見回りをしています。追肥もして、順調に生育しているので、早稲米はほとんど収穫を終えました。手作業で苗床をつくり、種から育てていた雑穀米や、コシヒカリやササニシキの祖先品種である「朝日」は、子供達も一緒にみんなで手植えを行いました。大人四人が一行に並んで植えていく様は見えていて微笑ましく、ついカメラに手が伸びました。手作業でのお米の栽培方法は、



毎月通っている田んぼの学校や、東温市にいる先輩から習ったもので、田んぼに縦横の線を引き、交わった十字部分に苗を差し込んでいく単純なもので、五歳、四歳の子供たちはすぐにお仕事を覚え、裸足で元気に田植えをしていました。二歳、一歳の子ども達はまだ田んぼに入ることは難しいものの、畦から応援し、家族全員で田植えが出来たことはよい思い出となりました。今年初めて挑戦した無農薬のお米栽培でしたが、来年への自信につながりました。色々話しながら大勢で植えていくと、長いように見える一列も、あっという間に植え終わります。やはりできるだけ手作業での農業、家族での農業を大切にしていきたいと再確認しました。

最近子供達も一緒に農作業ができるよう、できるだけ朝夕の涼しい時間帯に農業を行い、日中は屋内で心身の鍛錬を行っています。肥田式強健術という丹田や身体のトレーニング方法があり、もっぱら家族みんなでそれに取り組んでいます。また水風呂や乾布摩擦、水の見回りがたらランニングをするなど、農作業の時間自体は短くとも、一日の中で子供も一緒に心身の鍛錬ができるよう工夫するようになっています。

大きい子供達がやっていると小さい子供達も自然と真似をするようになり、このようにして人は学習していくのだと感心します。

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉を信じ、来月中旬までは暑さを凌ぎながら、家族で農業に勤しみたいと思います。

## ★活動報告

令和五 七月十六日、愛媛県護國神社・神楽殿にてひの心を継ぐ会定期総会を開催いたしました。十名の方にご参加いただき、討議いたしました。以下、議事録として記します。

・月報「ひ」の発刊を隔月とし、PDF 形式の Email から郵送形式に戻すこととした。理由としては、月報の内容をより充実したものにして欲しいとの要望があったため。会員の方々にご寄稿を依頼し、隔月にペースタウンすることでより良い紙面にしていく。また、PDF 形式になってあまり読まなくなったとの声もあったので、郵送形式に戻すこととなった。

・護國神社の神楽殿のカーテンを共同で寄付することを決定した。今後は総会や醒庵忌などの活動を神楽殿にて行うようにしたい。

・竹葉先生の遺品の保管場所について、話し合った。先日、三間町の公民館に保管されている竹葉先生の遺品を確認した旨を報告し、今後公的機関で保存をしていけないかを打診していくこととなった。

これらについてが総会で決議されました。また、今後も会員数を増やし、ひの心の普及活動に邁進していく所存でございますので、皆様方にはぜひ当会の会員拡大に向け、お声かけ、ご協力を賜れば幸甚です。今後とも、よろしく願います。

## ★一燈照偶 万燈照國

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願ひ申し上げます。

## ★年会費

一般会員	三千元
賛助会員	一万円
特別賛助会員	三万円
支援会員	一万円

## ★振込口座

愛媛銀行 普通預金 本町支店  
 口座番号 六一四二七三五  
 『ひの心を継ぐ会』